

中世より受け継がれる伝統美

西ノ島には、かつて中世に熱狂的なまでに愛好された田楽躍が、2つの神社を中心に伝承されています。
美田八幡宮と日吉神社の通称「十方^{しゅうはいら}拝礼」。美田八幡宮では奇数年の9月に、日吉神社では偶数年の10月に、それぞれ例大祭にあわせて奉納されます。今回は今年の9月に行われた美田八幡宮の十方拝礼を主にご紹介いたします。

田楽は田の諸霊を鎮めるために始まった芸能で、平安時代後期から地方へ伝搬したといわれています。美田八幡宮に田楽が奉納されたという記録は天正18年（1590年）が最も古いものですが、口伝によると後白河法王時代に島に入ってきたと云われています。

美田地区の美田八幡宮と浦郷地区の日吉神社の祭礼で奉納される田楽。

このうち美田八幡宮の田楽は、西暦奇数年の9月中旬の美田八幡宮の祭礼で奉納されます。祭礼は「神の相撲」「獅子舞」「田楽」の3部で構成され、このうち芸能として特徴をよく残している田楽は地元では「十方拝礼（しゅうはいら）」と呼ばれ親しまれています。「十方拝礼」という名前の由来は、幾度も礼拝を繰り返す所作と掛け声からそのような名がついた言われています。

全国に民族芸能で田楽と分類されており、重要無形民俗文化財に指定されているのは、約20ヶ所程度と、全国的に見ても大変貴重なものとされており、美田八幡宮の十方拝礼は、屈指の芸能と評価され、平成4年に国の重要無形民俗文化財に指定されました。

「神の相撲」「獅子舞」「十方拝礼」の3部で構成される演目は1時間半近く要する本格的な田楽芸で、衣装など色彩的にも美しく、しっかりとした伝統が中世の世界を彷彿とさせます。

また、その衣装からも伝統の歴史を感じることが出来、西ノ島町の自然民俗資料館である、ふるさと館には、過去に使用した衣装等が展示・保存されています。中には明治時代に使用されたと思われるビンザサラ（竹を細かく割ってまとめられている、踊りの際に使用する道具）などがあります。



十方拝礼



◀ ビンザサラが作られた年代や製作者名、踊りの役名等が記載されている。



踊り手がかぶる笠には特徴的な模様が

描かれており、その模様は、昔、長福寺（大津地区）の格天井に描かれていた模様が元となっています。しかし、昭和30年頃の長福寺の新築建て替えの際、その大部分は、海士町保々見地区の清水寺に移築され、一部分は波止地区の地福寺波止の堂の軒下に残されました。



▲ 踊り手が被る笠



▲ 地福寺波止の堂の軒下

次世代への継承

十方拝礼も、他の伝統芸能と同様に人材不足や指導者の減少等の理由から継承に苦難している面もあります。

しかしながら、昔から十方拝礼に携

わってきた方々は、古い祖先から受け継がれてきた伝統を守るため、また、地域の五穀豊穡を祈るため、次世代へ伝統を継承していきたいと話されます。



夏が終わりに差し掛かる8月の下旬頃、練習場である伝承館（大津地区）からは、十方拝礼の稽古の合図となる「胴（太鼓）」の音が聞こえてきます。

近所の住民は、この音から秋のはじまりを感じ、2年に1度の田楽に懐かしさや嬉しさを感じると言われます。

熱き想いを持つ指導者たちがいる限り、伝統は受け継がれ、十方拝礼の音が島内に鳴り響き続けます。